さくらいちえ―桜一会

弥生川　玲

この街の春は短い。
白一色の雪原の端に黄色いふきのとうが現れたかと思うと瞬く間に真っ黒な大地がのっそりと顔を出す。それを合図かのように、草木はいっせいに息吹き、特に桜はわれさきに芽をつけ、花を咲かせ、そして散って行く。
生き急ぐような桜のあとでは、その頃の私たちは春が終わったのか、もう初夏になるのか毎年いちいちとまどったりしたものだ。　人生が季節のようなものだとしたら、自分がいるのは今どのあたりなのだろうか。とっくに夏は過ぎて、暑さが癒えたもう秋の入り口あたりにたどり着いているのだろうか。
子供たちが成人したあと、小学校から同級生だった妻も家を出て行った。何が原因と言うわけでもないのだろうが、ひととおり儀式のような協議が終わったあと、泣いているのか笑っているのかよく判らない、いつもの顔で妻はポツリとつぶやいた。
「やっと楽になれる」
私はまた一人になった。
後悔はない。ただ、繰り返される日々のふとした瞬間に、―たとえばＰＣ入力中に言葉をさがしているときとか、あるいはトランスミッタからのｉｐｈｏｎｅの音楽が切り替わったときとか―澱のように沈んでいるあの頃の光景が、このごろはより輝きを増して浮かび上がってくる。胸から頭にかけて、熱い流れが逆回転の砂時計のようにさらさらと駆け上り、それらが空中に消えていくまで、それでも私は体だけは日常のふりをしようとしていたのだ。

ノストラダムスがまだはるか先だったあの頃に、ほんのふた月しか同級生でいられなかった少女の面影が、外れた予言の言い訳のように消えていくまで。

A-PART

少女—みちる—と出逢ったのは、受験生となった年の5月だった。

町内の中学校を統合してできた2年目の真新しい校舎の入り口で、飛び石連休最終日に部活で登校した僕は、セーラー服の少女を連れた女の人に声をかけられた。誰か登校してくる教師か生徒をあらかじめ待っていたのだろうか。明らかに安堵した様子をみせると、駐輪場に自転車を止めようとした僕に、いきなり近づいてきて勢いよく顔を覗き込み、長く黒い髪をばらつかせながら言った。

「ごめんなさい。職員室まで案内してくれないかな？」

目元がすっと切れ上がっていたので、作り物のような笑顔になっている。

僕はあまりの顔の近さにかなり驚いたが、部活の美術室までの途中に職員室があったし、おそらく転校生であろうセーラー服の少女に、年相応の関心を抱いたので、断る理由にはならなかった。

統合した中学校の制服は、デザインで揉めたらしく半年前にようやく決まり今年の春から、下の学年の女子は丸っこいブレザーにボックススカート、ワイシャツに棒タイ仕様となっている。そのため去年1年間は私服通学という異常事態が認められていたのだ。もっとも、僕らから上の学年は卒業まで前の中学校からの制服でよいことになっていたので、私服通学の恩恵はなかった。色とりどりの下級生を見ながら女子たちは憤慨していた。まるでファッションショーだと。

セーラー服を着て学校へ来ているということは、同じ学年の転校生でほぼ間違いない。

僕は画材ケースを玄関の床に置き、靴を履きかえると、アイボリーのスーツを着たストキングの足元に来客用のスリッパを置き、もう一足を襞スカートの真っ白いソックスのつま先に揃えた。右足のほう

が少しずり落ちている。
立ち上がる時、気づかれないよう素早く顔を見るつもりだったが、「ありがとう」と言った彼女とまともに目が合ってしまった。そうなることをむこうが確信していたかのように。ほんの一瞬だったのだろう。しかしその時は、スローモーションでしか覚えていない。
小さな肩を背中から抱きしめるように広がった真っ黒な髪の毛。卵の輪郭に似た顔あたりでは眉毛の少し上で切り揃えられている。一重ですこし切れ上がり気味の目尻。筋は通っているけどちょっとだけ低い鼻。珍しくニキビなどひとつもない。白い肌に、両端が上がった不自然なほど赤い唇。「ありがとう」を言ったそれは上も下も厚くて、悪く例えたら魚の口を思い当たらせた。日本人形に外国の映画女優の口元をつけたらそんな感じかもしれない、と思いながら前を歩きだし女の人に転校生なのかを訊いた。
「そうね。父親の転勤でね。」と少女と同じような唇が答えている。
「お母さん。」スーツの袖をつかんで引き留めると、少女が片足立ちで右足のソックスのずれを直して手を放した。
母親だったのだ。
若い。同級生の母親達と比べて、明らかに1世代下のような気がした。歳の離れた姉妹と言われても不思議とは思わない。この町にある北海道の出張所の職員で、前任地で引き継ぎがあったため、今の時期の引っ越しになったのだと言った。
すっと空気が動く気配がすると、とことこと少女が追い付いて左肩に並んで歩きだした。

驚いて目を向けた高さに頭の天辺が見える。シャンプーの薄香を感じるくらい制服を押し付けてくる。
「みちるっ。」
後ろで小さく鋭く叫ぶ。
みちると呼ばれた少女は、顔全体でにぃと笑うと母親のもとへ戻っていった。ほうっと溜息が聞こえる。
「ちょっと変わったところがあってさ。びっくりしたかい？」
少し間があって、ポツリと言った。
「いままで何とか普通学級ではやってるんだけど、まあ色々とね。今日はその話もしにきたんだ。」
僕は急だったから少しは驚いたけど、似たような子もいたので大丈夫だと答えた。事実、僕らのクラスとは別に特別な配慮を必要とする生徒のための複式学級があったのだ。
職員室の前で別れるとき、母親は「どうもありがとう」と言い。みちるも「ありがとう」と言いながら勢いよくお辞儀をした。
母親は困ったように笑いながら「なつかれちゃったねえ。」と言って、みちるの手を引いて中へ入っていった。僕は「なつかれちゃったねえ」の言葉の意味をとらえきれずに、左腕に触れたみちるの肩の意外な弾力を思い返しながら二階への階段を昇った。
美術室に入り、前日の放課後水張りしたばかりの水彩画紙を、窓際にずらした机の上にパネルごと置く。暦通りの休みでしかなかったので、1日おきのように繰り返される授業と休みのためかえって落ち着かなかった。それならいっそ学校で絵を描いていたほうがいい。昨日美術部の顧問に届けを出しにい

くと、「お前だけなんだけどな」と言いながらも「他の部活もやるとこあるしな」と許可してくれた。教師にしても、半端な暦だったのだろう。

ここからの景色が好きだった。

サンルームのように大きな窓からは、学校玄関から町道までの緩やかな勾配の、長いアプローチが見下せる。四角いグランドの片側短辺をなぞるように伸びた道の両側には、統合する前の各中学校の校庭からそれぞれ移設されてきた桜の木が、等間隔に向かい合わせで無事に花を付けていた。

昨年はうまく花が咲かなかったのだ。統合の象徴でもある桜を何とか救おうと、全国でも腕の良い樹医を呼んで手を尽くした結果、今年はどの木も満開に花を咲かせ、今はその花びらを盛大に散らせ始めている。

僕はこの風景を切り取ろうと、下書きの鉛筆を走らせた。

音楽室の戸を閉めていないのか吹奏楽部の個人練習の音が聞こえる。ふと音が途切れた合間に野球部のノックを受ける掛け声がラジオのように聞こえている。

念入りな下書きの目途がやっと見え始めたとき、僕はそのアプローチを下っていくみちると母親に気づいた。桜が散る中を、アイボリーのスーツと少し遅れて紺色の背中が移動していく。花散らしの風の中で二人の真っ黒な髪が薄桃色の花びらとじゃれあうように舞っていた。僕は今度は大胆に、みちるの後ろ姿を見つめた。どうせどこにいるのかわからないのだ。

つと、みちるが足を止めた。桜の花びらをつかもうとするように、両手を挙げて手のひらを空に向けた。そのまま跳び上がって体ごと振り返ると、何の躊躇も見せずに僕の顔を見つけ両手を振った。そう

なることを確信していたかのように。

次の日、朝のショートホームルームで転校生としてみちるが紹介された。

僕のクラスの初めての転校生でもあった。さわさわと教室が波立っている。男子は単純にその容貌に浮足立っていたが、女子はそれが自分たちのテリトリーを侵しかねないことを敏感に察知していた。黒板に名前を記され、自己紹介するよう担任に促されると、校則どおり髪を束ねたみちるは少し声を震わせながら、それでも意を決したように、道南の大きな町からやってきたこと、自分の名前、そして何故か生年月日までを一気に告げた。

教室が静まり返った。告げられた生まれ年に違和感があった。間違えたのか。

担任があきらめたように口を開く。

「小学校の時大きな病気をしてな。もう一年6年生をやり直してます。実際の年齢はみんなより1つ上だけど、あまり変な気を使わずに仲良くしてあげてください。」

教室がざわめいていく。みちるはそれでも動じない。1年上の生年月日の波紋を感じていないように見えた。見回す視線が、探し当てたかのように窓際前から5番目の僕のところで止まる。ふと笑い顔になったかと思うとみんなの前を向いて、真顔でお辞儀をした。担任が声を張り上げてざわめきを静めると、あらかじめ用意してあった後ろの席に座るようみちるに言って、そのまま1時間目の授業が始まった。

休み時間になると、すぐにみちるが僕の机の前にやってきた。

「名前教えて」みちるが言う。クラスの視線が一斉にこちらに向いた気がした。自分の名前を告げると、みちるは下の名前を縮めてちゃん付けで僕のことを呼んできた。いくらなんでも面食らっていると、隣の男子が面白そうに冷やかし始めた。

僕は昨日のいきさつを話し、誤解を解こうと思ったがその努力もやめてしまった。何を言っても言わなくてもそこから主観が独り歩きし、いきつく先は大して変わらないのだ。親しい友達もいなかったし、当時は珍しかった離婚した片親家庭の子供に対する、周囲の気の遣い方を拒絶しているうちに、僕は非常に扱いづらい人間になっていたのだろう。必要な時以外は話をしなかったし、普通の男子のようにつるんで遊びに行くということもなかった。当然クラスでは浮いた存在となっていたが、それでも何をされるというわけでもなく、同情と好奇の入り混じった扱いをされるだけだった。どのように詮索されても、誰かが助けてくれるわけではない。

みちるは名前を聞けたことで満足したのか、あとは何も言わずに自分の席に戻っていった。世話焼きな女子の輪がみちるの周りにできる。いろいろな質問をされていたようだが、話が盛り上がっている様子もなく、やがてその輪も解けていった。

近くを通ったその女子達が小声で「ちょっとお　なんか変だよね。」と話を交わしている。その中の一人、部活が一緒だったミキが立ち止まり僕の方に体を向けると警告のように言葉を投げてきた。

「あの子、なんか変。」

そのまま歩き去った。

２時間目のチャイムが鳴り始めている。

あの当時、教学校側がみちるの事情を生徒達に話し、理解を求めることをしなかったからといってそれは仕方のないことだったと思う。コミュニケーション障害、学習障害などという概念も、ケアのスキルもない中で途方にくれていたのだろう。みちるはその後も小さなトラブルを繰り返した。学習でもほとんどの教科ができていなかった。ただ国語だけは得意だったようで朗読は俳優のように臨場感があったし、小テストの成績もよかった。

ある日僕は担任によばれて職員室に行った。

受け持ちの生徒は全員下の名前で呼ぶ教師だった。

「みちるのことなんだけど、お前のほうで少し気にかけてやってくれないか。」

どういうことかと思っていると担任は言った。

「今周囲とうまくやれている状況じゃない。話し相手というわけではないが、それとなく声掛けとかしてやってほしんだ。実はみちるのお母さんからも相談されていたんだが、みちるはお前のことは信頼しているらしい。クラスの連絡網もお前からにしてるからな。」

―なつかれちゃったねえ―

あの日のみちるの母親の言葉が意味をもって浮かんでくる。

担任に言われたのもあって、みちると話す時間が多くなっていた。このころみちるは完全にクラスから孤立していて、クラスの女子はひそかに「明太子」とか「くちびるお化け」などと影であだ名をはや

らせていた。それは多分に容貌へ対するやっかみも入っていたのだが、多少いじめに近いこともあったのかもしれない。しかし得体のしれない人間の相手はしていられないということか、進路を考える時期で問題を起こしたくないという心理も働いたのかクラスから浮いている僕と、孤立しているみちるの組み合わせは表立って悪意の表面に浮かんだことはなかった。

みちるはよく笑う。時々おかしな受け応えをするが、そんな時は決まって「ごめんね。あたしちょっと変だからさあ。」そう言って、また笑うのだ。

そんな時は、胸のあたりがキリキリと切なくなった。

世界中の誰からも、理解されないと頑なに信じていた、信じようとしていた僕の幼い心の壁をみちるはゆうゆうと乗り越えてきたのだ。この少女だけは深い奥底の核に共鳴しているのだ。僕はそれが、自分に都合のいい幻想だとは気付かずに、いつしかそれがみちるを庇護するべき理由と信じていたのだ。

部活のない日は、放課後少し居残りをして数学を教えていた。みちるの学力は簡単な四則計算のルールや分数、少数あたりからあやふやでとてもふつうの授業にはついていけなかった。みちるは集中力が続かない。計算していても窓の外を飛ぶ鳥に目が行くし、消しゴムが転がったと言っては、大騒ぎするのだ。

その日はいつもにもまして上の空だった。練習問題も考えるふうもなく、シャープペンシルを弄くっている。わかないのだと思い、計算過程を教えたが曖昧に頷くだけで進まなかった。やがて、スクールバスの1便と2便の間までと決めていた居残りの時間が終わり、片づけようとしたとき、みちるが下を向きながら言った。

「いっしょに帰っていい？」
みちるの家は、学校から３㎞ほど離れた職場の公宅だったが、僕の家を通ると二十分以上遠回りになる。それでも構わないならと言うと、顔全体で本当にうれしそうに笑った。
「よかった。いやだって言われるかもって、そればっかり考えてた。」
今は葉桜も終わろうとしているアプローチを歩いて町道へ出る。平日の学校のある日は自転車を使えない。いつもなら踏切を越えて商店街を抜ける左側がみちるの通学路だったが、今日は住宅街へ続く右側へ曲がる。
歩きながらみちるは、与謝野晶子やら中原中也の詩を諳んじてみせた。一度読むと完全に憶えてしまえるらしい。その能力があったら、どうして他の歴史だとか地理だとか、数学の公式を憶えられないんだろうと聞くと、
「だって好きじゃないから。」と当たり前のように答えた。
「一期一会って知ってる？」唐突にみちるが訊く。
前に国語で習っていたので、二度と会えないかもしれないという覚悟で人と会いなさいだったかなと言うと「まあまあいい感じ」と笑う。
「じゃあ　さくらいちえって知ってる？」
さくらいちえ…口の中で繰り返すと桜に一会　なのだろうと見当をつけた。聞いたことがなかったので知らないと答えると「今あたしが作ったの」と真面目に言う。
「桜って毎年咲くけど、同じ花びらに会うことは二度とないでしょ。なんか似てるなって思って。」

それきりぷつりとその話は終わりになり、遠くチセヌプリの残雪を指さして「にわとり！」などと一人ではしゃいでいた。　中間テストが迫っていたので、二日後の土曜日の授業が終わってからみちるの家で数学を教えることになった。友達の家にも遊びにいったことがないのに、女子の家に行くことには相当抵抗があったがその日の帰り道、半ば強引に約束させられた。もう、断られるとは思っていない笑顔だった。

公宅は4軒が1棟になった平屋の建物だった。青い板金屋根に煉瓦色のコンクリートブロックが同じように3棟並んでいる。小さな道を挟んで、出張所の青い大きな三角屋根の建物が見えた。

手前の一番道路側のドアの苗字だけが書かれた表札を確かめ、呼び鈴を押す。呼び鈴が鳴りやむ前に灰色のスチールドアが勢いよく開いた。みちるはまだ制服のままだった。「まってたよ」にいっと笑った。

中に通されると、桜の日に会ったみちるの母親が居間と続きなった台所で何か用意をしながら「今日は数学みてくれるんだって。ありがとう迷惑かけるね。なんもないけどゆっくりしてって。」後ろで一つに束ねた髪を揺らして振り返ると、ひとかたまりのフレーズを歌い上げるように言い、その後で「みちる　いいかげん着替えておいで」と棒読みするように言った。

みちるはすっと居間の右側の部屋に入り、引き戸を閉めた。すぐに乾いた衣擦れの音が聞こえる。

「帰ってきてからずっと部屋の片づけしてて、制服のままなのさ。お昼もまだなんだよ。おとといからすこしづつやれって言ってたんだけどね。本当にのろまで困るさ。」

台所の食卓に置いた即席麺に具材を載せながら、それでも「お昼だけ食べさせてやって」と申し訳なさそうに言う。もう1時をまわっている。ここの主は、現場測量に行って、夕方まで帰って来ないからそんな緊張しないでと笑いながら付け加えた。係長なのに図面を作るため土曜日の今日も残業なのだと言った。

質素な家庭だった。サイドボードもなかった。家族の写真も、置物や人形の類もなかった。取り外していないストーブを挟んで、二十インチくらいのテレビと僕が座っているソファが向かい合わせに置いてある。ソファに並んだ背の低い木製ラックの上に電話がおかれ、壁に掛けられたボードには色々な番号の切り抜きに混じって、クラスの電話連絡網が貼られていた。僕の家の欄が桜色のラインマーカーで縁取らている。まっすぐ伸びた線はみちるの家の欄へ接続していた。

左側の部屋は引き戸が閉められていた。寝室にしているのだろう。あまり見ていてはいけないような気がして目をそらすと、「おなかすいた。」オーバーオールのスカートに着替えたみちるが、引き戸を開けてばたばたと居間から食卓に向かう。ほどいた真っ黒い髪に赤いTシャツと空色のデニムの取り合わせはひどく幼く見えて、理由もないのにちょっと悲しかった。

遅い昼食を済ませて、数学の勉強が始まる。

着替えをした洋室がみちるの部屋で、こちらも学習机とタンスとベッド以外に物はない。年頃のアイドルのポスターも、カレンダーさえ白いクロスの壁には貼っていなかった。これで部屋の片づけにどれ

ほどの時間がかかるというのだろう。造り付けの収納棚に押し込んだとでもいうのだろうか。　引き戸を開けたまま、母親は気を使っているのか、ソファではなく食卓のイスに座って本を読んでいる。直接見えはしないが、ページをめくる音が問題を解く合間に聞こえてくる。

みちるは学校とは違って、集中して勉強していた。机の横のパイプ椅子に座って、僕はその横顔を見つめていた。考え込むたびに、赤い唇が引き締まったりつぼんだりする。

やがて3時を回ると、「小休止にしたら」と母親がやってきた。「ケーキ買ってきたんだ。商店街の」と町内では老舗の菓子舗の名前を挙げ、「札幌の店にも負けないよう」と嬉しそうに言った。

「コーヒーでいいかい？インスタントだけど。みちる　角の宮田商店で角砂糖買ってきて。切らしてたんだわ。」

みちるは渡された五百円札を大切そうに胸ポケットに入れると、「お砂糖　お砂糖」と口ずさみながら玄関を出て行った。　母親は居間にテーブルを出してイチゴショートを二つ並べると、「こっちに座ってくれる？」と僕をテーブルに着かせた。薄緑の半袖Tシャツを着たみちるの母親が、ジーンズの膝を折ってすっと正面に降りてくる。

「いつも本当にありがとうね。ああいう子だから大変でしょう。」

曖昧に答えずにいると、「今日も部屋の散らかってるもの片したかと思うと、あの子ったら、君がくるまで部屋中掃除機かけまくっていたの。何回も何回もね。特に今座っているあそこ。」とパイプ椅子のあるあたりを指さした。

「でもね、来てもらってこんなこと言うのもなんだけど、あんまり深入りしないでやって。変に期待も

たせると後で可哀想だから。」
テーブルの縁を指でなぞりながら、母親はあらかじめ用意していた言葉なのか、それともその場で思いついたのか、どちらともつかず話し始めた。
「あの子ね、どういうわけだか自分の味方になってくれそうな人を見つけるのがうまいの。勘といったらいいのか…。」
お湯を沸かしている音がかすかに聞こえる。
「もちろん考えてやってるんじゃないよ。本能みたいなやつ。」
本能と言う言葉がなまめかしく響く。母親は、ざらりと目線を上げると「最初はその子たちも仲良くしてくれるんだけど、最後はもてあまされてまた一人になっちゃうんだ。一緒にいると仲間外れにされるからって子もいたな。特に君には、あの子がもっと別な感情を持ってしまうかもしれない。なんせ初めての男の子だからね。だから」。
お湯が沸いてくる音が大きくなってくる。
「だから、君がもてあましたとき、あの子が余計可哀想なの。わかるでしょ。」
別な感情…。別な感情なら、もう僕の中の少なくない部分を占めている。
大丈夫だ。みちるを持て余したりなどしない。僕を理解できるのも、みちるしかいないのだと思った。かすかに眉根にしわを寄せて哀願するような目を見返しながら、僕はもてあましたりしませんとだけ言うと、母親はすうっと感情のない顔になり「それが本当ならいいけど。」棒読みのように言った。
赤いケトルの笛が沸騰を知らせている。母親は目を伏せてするりと立ち上がり、台所へ向かった。ド

アを開ける音がして、みちるが大きな声で「ただいまあ」と帰ってきた。台所で紙袋から出した角砂糖を渡すと、みちるはさっきまで母親がいた場所へすとんと腰を下ろす。

「おいしそうだね。早くたべよ。」

コーヒーカップと琥珀色に透き通った角砂糖入れがテーブルに置かれる。みちるは、入れるかどうか確認もせず、角砂糖の塊を三個づつ、僕のカップと自分のカップにぼとぼとと落とし込んだ。

甘いものがそれほど得意ではなかった。ケーキの甘さを砂糖なしのコーヒーでやり過ごすつもりだった。みちるは、にこにこしながらケーキを頬張り見る間に自分の分を食べてしまった。僕は甘さに辟易しながらようやく半分以上までこぎつけたが、フォークを持つ手がそれ以上進まない。みちるは肘をついた両手で白いコーヒーカップを唇に傾けながら、上目使いに僕の様子を見ている。

まさかと思いながら、食べたいのと聞くと「うん」と頷く。

食べかけだよと言うと、頭を少し傾け「変？」と聞く。

僕は笑いながら、ケーキとフォークの乗った皿を向いに押しやった。変じゃない。

地層のようなスポンジの断面を、細い指に持ち替えられたフォークが削り取っていく。僕の残りの部分も感情に取り込まれていく。みちるは赤い唇の端に付いたクリームを指で取りながら「おいしいね」と笑いかけてくる。

僕は湧き上がる強い衝動に戸惑った。持て余すものか。護るのだ。みちるの無垢な魂を。護っていくのだ。後ろの食卓に座っている母親の何の感情もないような目線を視界の隅にとらえながら、僕はみちるを見つめ続けた。

それだけがその時できることのすべてだった。

僕は部活に出なくなって、あの日の絵は下書きのまま放置されていた。

相変わらずスクールバスの1便と2便の間の時間、みちるの数学をみてやっていたのだ。

放課後美術室に向かおうとしない僕に、ミキはあきらかに非難する声で「コンクールの方はどうするの？描かないと間に合わないよ。」と僕にとっては、もうどうでもよいことを言う。

「変な奴とつきあって、戻ってこれなくても知らないからね。」

変な奴？思わず語気が荒くなる。目つきも変わっていたのだろう。ミキは半身をかわすと、意味ありげに「普通じゃないんだよ」とつぶやいて歩き去った。

普通じゃない…今更そんな言葉でみちるを表現しても無意味なはずだ。

それなら、いまの僕のことを指して普通の状態ではないと言いたかったのだろうか。

今では前にも増して、みちるといる時間が増えていていた。この前の日曜日は大川のほとりに自転車を走らせてスケッチをした。みちるは、画用紙の下書きができていく過程を、一言も喋らず飽きることなく見ていた。

みちるはそれまで歌謡曲しか聴いたことがないというので、僕は自分が好きな洋楽を何曲かカセットテープに入れて渡したこともある。次の日、興奮気味に「いとしのレイラ」と「The Long And Winding Road」が良かったと言った。僕は嬉しくなって、「レイラ」はもともと別な曲をふたつくっつけたものとか、オーケストレーションされて、ポールがいかに憤慨していたかとかを話し続けた。みちる

は、その間頷きながら、瞬きを忘れて聞き入ってくれた。
平日一日置きと土曜日はみちるにとっては遠回りをして一緒に帰っている。商店街の方を回って僕が遠回りしてもいいと言ったが、チセヌプリの残雪の見え方が好きだからと、ルートを変えなかった。みちるは毎日そうしたがったが、夏至が近いとはいっても続けて遅くなるのは避けたほうがいいとやっと納得させた。
町道の交差点で別々の方へ曲がり十数えたら、振り向いて手を振りあう。それが、みちるが一緒に帰れない日の代わりに出してきた約束ごとだった。振り返ったみちるが手を振り、前を向いて歩いて行く。僕はその日なぜか目を離すことができずにいた。夏服になった白いセーラー服が踏切を渡って行く。向こうに行くのを待っていたかのように警報機が鳴り、遮断機が下りてくる。列車が通過する直前、束ねた髪を振り回してみちるは確かにこちらに向き直った。しかし風圧をまき散らしながら特急の長い胴体が駆け抜けて行ったあとには、みちるの背中はもう小さくなっていて、それさえも初夏の陽炎の中に揺れて溶けていった。
それが、約束ごとの最後の日になった。

「あの子のお母さん、自分の父親と子供作っちゃたんだって。」
ミキからその話を聞いた時には、すでにクラス中の噂になっていたらしい。もしかしたら、学校中に知れていたのかもしれない。
「普通じゃないってそういうこと。母親が浮気してひとりで出て行っちゃって、あの子のお母さんだけ

になって、家事とかやってたんだけど、そんなふうになっちゃって、あの子を産んだってわけ。中学卒業してすぐだったらしいよ。」

6時間目が始まる休み時間にミキが僕を呼び出し、校舎の一番端の通称青階段の薄暗い踊り場で、密告者のように話を切り出した。細切れのセンテンスがひそめた声に乗って流れてくる。軽く高揚しているのか、息継を忘れていたかのように頬が紅い。みちるのことをあの子としか呼ばない。苗字も名前も口にするのはいやだと言うのか。

何故ミキがその話をしたのかわからない。クラス中の噂になってるのに、なお気付かない僕に苛立ったのか。みちるから遠ざけ部活に戻したかったのか。おそらくクラスに話を撒いたミキ本人にも、今でもわからないはずだ。根も葉もない悪質ないやがらせだと思う前に、僕はすぐにはその内容を理解できなかった。

嘘だ。そんなことあるはずないと言った。みちるの母親は、あの日「父親の転勤でね」と言っていた。

「あたしも最初信じられなかった。うちのお母さん、あそこの寮に働きにいってるでしょ」

この町にある道の出張所の2階は独身職員の寮も兼ねていて、ミキの母親はそこで食事を作ったり清掃を行う臨時職員のひとりだった。

「一緒のおばさんが、たまたま誰もいないとき所長さんから聞いたって。今度転勤してきた係長の奥さんずいぶん若いですねって言ったら、係長の実の娘さんだよって。ちょっと訳ありでって、それ以上は濁されたらしんだけど。」

父親の転勤とは母親自身にとっての父親と言う意味だったのか。だとしても、みちるが実の祖父にあ

たる男と実の母親との間にできた子供とは限らない。どのような事情か未婚でみちるを身ごもり、そのまま実家で生んだと考えるのが自然ではないか。たしかに、みちるの母親の普通ではない若さを考えると中学卒業で生んだとする話の方は納得もするが。そこでちくりと胸に錐が打ち込まれた。

一つの小さな合点ではあったが、それが底なし沼へ引きずり込むような疑念の昏い穴を開けた。ミキがいよいよ声を潜めて、催眠術をかけるようにその穴を広げにかかる。

「高校に行っている先輩の」と、同じ美術部だったひとつ上の男子生徒の名前をあげる。

「その人に聞いたんだ。先輩のお父さんがあそこで働いてるから。」

三年に一度の転勤が当たり前であり毎年誰かが異動するので、小学校から高校まで必ず数人はその職場の子供がいた。

「こっちに来る前、同じ支庁の出張所にいたんだって。そこでもやっぱり噂になってたみたいなんだけど三人とも同じ顔してるって。本人たちも認めたらしいって。でも秘密にしてるんだって。」

一重の目、通った鼻筋、赤い唇、細胞分裂による自己複製。中年の男、壮年の女、少女。

頭の中を無表情な能面が舞っている。本人たちも認めたって？嘘だ。ありえない。無垢なのだ。みちるは無垢でなければならないのだ。そのような汚れた関係から、生まれてくるはずがないのだ。

ミキは自分の言葉の効果を感じ取ったのか、泣き出しそうな顔をしながら－もしかしたら笑っていたのかもしれないが－、声は勝利者のようにささやいた。

「親子同士だと、変わった子ができるんだって…。」

みちるのこれまでの言動がたちまち結びつき、その言葉を後ろ盾に記号となって心に沈殿する。

僕は別の意味で無垢だった。その背徳の行為が想像の縁に上がるだけで吐き気を催すくらいに。状況証拠とも呼べない事象を前に、信じていたい気持ちよりかえって疑うことの方が楽なくらいに。

永遠に続くかと思われた休み時間が、ウエストミンスターのチャイムに救われる。教室に戻るミキの後に続く僕は、ノックアウト寸前のボクサーだった。

急に周りが視界に入ってきた。暗い深海から浮き上がったように、なにもかもがむき出しの眼球に映りこんでくる。

嫌悪の視線。遠巻きに気の毒がっているささやき。あるいは、身近に起こったスキャンダルを楽しんでいる笑い。絶対安全圏から発せられる、善意とは呼べない意識が僕を包み込む。息が詰まった。授業も、教師の声や答える同級生の声が何の意味ももたず頭の中を流れ去って行く。

ひとりでも平気なはずだった。ただそれは過剰な関心を持たないでくれたらという条件付きだったのだ。僕はそれを思い知った。今や、全体から切り離された好奇の生贄としてはっきりと形を成しつつある。このまま戻れない恐怖と焦りを感じた。

みちるは噂が聞こえていないのか、その態度に変わることはなかった。

確かめてみようか。どうやって?本人に聞くべきか…。確かめたところで、どうする?

混乱をきたした意識の内側で、同じような問いかけが回転木馬ように巡っている。

朝から厚い雲に覆われていた空は、この季節の午後とは思えないくらい真っ黒となり、蛍光灯の白々しい光がいよいよ心細く感じられた。放課後のチャイムが鳴っている。帰りのショートホームルームが

終わり、掃除が終わり、いつものように僕とみちるを残して、同級生たちが部活へ向かったり下校したりする。最後に教室を出て行ったミキは、戸口で首だけ巡らせると、念を押すようにゆっくりと瞬きをした。

みちるはいつものように、ワークブックを広げている。

いつまでも立っている僕を、上目づかいで見上げた。見返すこともできず、時が止まった。

「どうして座らないの？」

数時間にも感じられる何十秒かが過ぎた時、そう言いながら、みちるは赤い唇の端を上げて、にいっと笑った。

僕は逃げた。噂が真実であろうとなかろうと、すでにそれは関係なくなっていた。

ただ恐かったのだ。今ならまだ間にあう。帰還限界点を越える前に引き返せという強い衝動に抗うことはできなかった。みちるを護りたいと思ったのだ。だが、あの子はもう僕の中では護るに値しなくなったのだ。背徳の子、一度捺された刻印はマーカーのように染みつくことはあっても、消えることはない。それが虚偽であろうとも。背徳の子。それはウィルスのように僕にも感染するだろう。だから感染する前に、切り捨てるのだ。無垢ではないのだから。

今日から勉強をやめようと、それだけを言って、僕は鞄をつかんで歩き出した。みちるはすうっと無表情になっていった。いやでも目の端に入る。みちるはどうして？とも、なぜ？とも何も言わない。背中を向けて教室を出る。みちるの目線がずっと追いかけてくるような気がして、僕は廊下を走り出して

いた。
玄関を出ると、アプローチのアスファルトに無数の黒い染みが広がり始める。雨が降り出していた。そして土砂降りとなった。

みちるが帰って来ないと電話があったのは、雷が鳴り響き雨の勢いが少しも収まらないまま、後ろめたい味のない夕食をひとりで終えた時だった。みちるの母親は電話口で取り乱したように、何時頃帰ったのか、一緒じゃなかったのかと聞いた。僕は今日は勉強せず一緒にも帰らなかったと都合の良い事実だけを伝えた。喉からうまく声が出ない。みぞおち当りに電流が走る。
「何かあった？」受話器を持ち替えながら、相手の探るような問いに黙ることしかできない。カーテン越しにもわかる光がひらめき、すぐに大きな音が地響きをたてて家を震わせる。沈黙が続き、電話の向こうの雨音さえ聞こえそうな気がした。すでに大まかな察しがついたのだろう。
「ダカラ、イッタジャナイ。」
雨音に交じって、ノイズのような言葉が拾われる。ガチャリと電話が切られ、短い発信音だけが僕を責め続けていた。
受話器をおくとすぐに担任から電話があった。
帰って来ないとの連絡を受けて、教師達が手分けしてクラスの生徒に心当たりがないか聞いているのだと言った。スクールバス2便で帰る生徒が、傘も差さずびしょ濡れで踏切付近を歩いている女子生徒を曇った車窓越しに見かけたらしい。みちるかどうかはわからないが。

みちるの母親と同じような担任の質問に、さっきと同じように答える。雨が強く降りそうだったので今日は勉強を中止にしたのだと、口が嘘をつけ加えた。単なる家出か、それとも事故や事件に巻き込まれたのか、いずれにしてもこの雨では探しようもないので、明日の朝まで待って方針を決めるのだと言っている。何か分かったら、お前には電話する。だからお前も、どんな些細なことでも、すぐ伝えるようにとの指示を残し電話は切れた。

「何かあったのか？」とは聞かれなかった。

天気が変わりやすい花冷えの季節だ。まして朝から雨予報の日に、折り畳みの傘ぐらい持っているだろうに。見かけた生徒がみちるであってほしくなかった。帰ってこないことが疑いもなく自分のせいなのに、少しでも罪が軽くなるよう、せめて濡れないでいてほしいと切実に願っていた。この雨では、傘など何の役にも立たないことがわかっていながら。

ベッドにあおむけのまま、眠ることもできずに時間だけが過ぎる。雨は止まなかった。

鍵を開けて母親が帰った気配がする。相変わらず酔っているのだろう。廊下の壁にぶつかりながら一度居間へ入り、それから洗面所へと歩いていく音がした。たぶん一時を回ったのだと思った。みちるが帰ったという連絡はまだない。いや帰っていたとしても、連絡は朝になってからだと思い直し、案外何もなかったように学校へ出てくるかもしれないとぼんやり思った。

「レイラ」が聴きたかった。あの叫ぶようなリフレインの中で、自分を忘れてしまいたかった。

カセットレコーダーのボリュームを絞って、頭出しで再生する。スライドギターのリフが激しい雨音の中で泣き声を上げる。エリック・クラプトンの思いつめたような歌声がレイラを求め続ける。，愛し

い人よ　僕の心を安らげてほしい，と哀願し続ける。レイラは応えたのだろうか。
いつの間にか夢を見ていた。ずぶ濡れのみちるが背中をむけて、大川の縁に立っている。水面は褐色に濁って渦を巻いて流れて行く。瞬く間に広い川幅いっぱいに濁流が押し寄せたかと思うと、みちるの足元をあっという間にさらっていく。僕は駆け寄り、流れる水の塊の中から、かろうじて指の先を握って引っ張りあげた。みちるが顔を上げる。唇が頬まで裂け、目の光がガラス玉のように煌めく。真っ白な肌が硬質の鱗で覆われたかと思うと、全身が僕に巻きつきギリギリと締め上げられた。声を上げようとしても、声帯を掠るだけで音にならない。吐息がかかるほど顔が近くなり、ガラス玉のような目が無機質に見つめるだけだった。どこからか風鈴が聞こえた。
電話が鳴っている。ドア越しに居間のベルが鳴り続けていた。窓越しに朝の気配がしている。
僕は飛び起きて受話器を取った。担任だった。
みちるが見つかったと言っている。

雨が止んだ明け方、自宅に戻ったのだという。夕暮れの雨の中、道に迷って歩き回り、完全に夜になってからは鍵のかかっていない農家の倉庫で過ごしたのだと話しているらしい。熱があり、震えているので診療時間を待って病院へ連れて行く、今日は土曜日だし休ませると母親から電話があったのだと言う。
迷ったのならどうして、近くの家に助けを求めなかったのか。車だって通りかかったろうし、公衆電話だってあるではないか。帰りたくなかったのだと僕は思いを巡らせた。それだけ深く、傷つけてしま

ったのか。ただその痛みを思うよりも、僕は少なくとも最悪の結果でなかったことに安心し、自分の事しか見えていなかった。

担任は朝のショートホームルームでみちるが帰ってきたことを短く伝え、慣れない町で道に迷っただけということにした。事情を知らないほとんどの同級生は、ありそうなことだと受け入れていた。放課後、帰ろうとすると担任がやってきて、帰りに町立病院に寄ってほしいとみちるの母親からの伝言を告げて行った。必ず来てほしいとも言っていた。入院したらしいと担任は付け加えた。

病院は商店街を抜け、小高い信号の坂を下りたところにある。雨の後、急速に回復した陽射しを受けて、白い建物は洗われたように光っていた。自動ドアをくぐり、靴を履きかえる。こうなった原因を母親は訊きたいのだろう。「それが本当ならいいけど」と言った顔が蘇る。僕は結果的にみちるを持て余してしまったのだ。

だがそれは、みちるの家族の事情によって引き起こされたものだ。自分だけの、いや自分のせいではないと思うと少し楽になった。訊かれたら、そのままの事を話すのだ。僕は、気持ちを決めると受付でみちるへの面会を告げた。受付は、困った顔をして家族以外面会できない状態なのだと言っている。面会謝絶の文字が浮かぶ。まさかそんな…戸惑っていると、廊下の向こうからみちるの母親が足早にやってきて、横に立った。

「私が呼んだんです。病室の前のベンチで話をするので、中には入りません。お願いします。」

そう言った。

受付は、「それならいいでしょう。でも短めにお願いします」と言った。

みちるの母親は、目で僕を招くと先に立って歩き出す。無造作に束ねられた髪が薄緑の┐シャツの背中に揺れる。濃紺のジーンズが細見の脚にぴったりと張り付いている。

「もう来る頃だと思って、出てみたんだ。ちょうどよかったね。」

みちるの母親は、前を向いたままそう言った。突き当りの病室までくると、壁際のベンチに座るよう促された。座った先、廊下を挟んだ個室の白い引き戸が閉められ、面会謝絶の札が掛かっている。入り口の壁のプレートにはみちるの名前が記されていた。母親は「ちょっと待ってて」と言い残し、病室の中へ入りほどなく出てきた。

「点滴みてなきゃいけないから…」

母親はそう言いながら、僕の横に腰を下ろす。化粧気はなかった。瞼が腫れぼったい。

寝ていないのだろうと思った。

ひとしきりの沈黙が訪れる。肘を膝に乗せ、両手で顔を覆い深い息を吐いて呟くように言った。

「大したことないと思ってたんだけど、肺炎おこしかかってね。前に大きな病気してるから、影響するんだわ。このまま熱が下がらなかったら、厚生病院に移すって。」

隣町の総合病院…そんなに重いのか。みちるの母親は、言葉を慎重に選んでいるように聞こえた。前の大きな病気がそれほど深刻だったのだろうと、後になって気付いた。

「君のこと責めてるんじゃないよ。どこかで、こんなことになるんじゃないかと思ってた。少しは信用もしてたんだけどね。」

顔を手のひらから離すと、「あの子ね、ずっと君のこと探してたんだってさ。玄関にもいなくて、は

ぐれてどこかで君が待ってるって思ったらしいのね。雨の中探し回って、気づいた時はもう暗くなっていて、夜中に帰ったら起こして叱られると思ったんだと。朝帰ってきたよ」。

置いていかれたとは思ってなかったのか…いくらなんでも雨の中、夜遅くまで探し回ることなど考えられなかった。みちるは本当のことを言っていないのだと思った。そして僕はその意味を理解した。僕はがっくりと頭を垂れると、学校で聞いた噂、その噂によってみちるとの関係が恐くなったこと、そして一方的に学校を飛び出したことを告白した。身じろぎもしないで聞いている母親は、時折刺されたかのように肩を震わせる。それでも僕は訊かずにはいられなかった。みちるは誰との子供なのか。噂は本当なのか。目の前の人にどうしても答えてほしかったのだ。

「噂が本当だとして、どうするの？」母親は顔を上げた僕の目をまっすぐ見据えて言った。

思わず本当なんですか？と聞き返す。

「本当でもどうでも、うちの子に何の罪があるの？どうしてありのままを見てくれない？君ならみちるのそのままをわかってくれると思ったのに…」

そして「君のことかばってるんだよね」と僕がさっき理解したと同じことを言った。

おそらく、みちるは早い段階で僕が先に帰ったことに気付いたはずだ。同時に自分が切られたことにも気付いたはずだ。このまま帰ったら、親に全部話さなくてはならない。そうなれば僕が責められる。勝手に夜道に迷ったことにすれば自分のせいだけで済む。そう考えたのだろう。もっともっと大変なことになると、思いが至らないくらいに一所懸命に考えたのだろう。

「そんなことあるわけないじゃない。前の町でもさんざん面白がられた。」

思い出したくないほどの屈辱もあったのだろう。ぎゅっと唇の端を引き結ぶと涙を落とした。
「うちの母さんが出て行ったのは本当。でも父さんは男手ひとつで精一杯私を育ててくれた。再婚の話もあったんだけど、わたしが嫌がってダメになったんだわ。そのうち中学に入ってグレちゃってね。学校呼ばれても警察呼ばれても、全然怒んないんだ。父さん、自分のせいだから怒れなかったって後で言ってた」
指で涙を拭うと、遠くを見るように視線を上げて言葉を続けた。
「悪い仲間とつるんで帰らない日も多かった。そのうち、妊娠がわかって…父さん驚いてたな。さすがに泣いていた。それ見て、本当に切なくてね。でも、父さんがお前たちの面倒みるから絶対産めって。あたしも泣いちゃったよ。で高校行かずに秋にみちるを産んだんだ。」
みちるの本当の父親はどうしているのかと訊くと、「その時は高校卒業してアルバイト暮らしだったからね。父さんも任せるつもりはなかったみたい。向こうもそれは望まなかったし。親もだらしなくて。」と言った。
「いま札幌にいるんだ。まともに仕事してるみたい。」そう付け足すと、考え事をするように目を閉じた。
「ありがとう。大体の事はわかったから。学校帰りにわざわざごめんなさい。」
みちるの母親はすっと立ち上がると、深く頭を下げた。僕は立ち上がるしかなかった。
会えませんかと言うと、顔を上げずに「今眠っているから　もう構わないで」と静かに言われた。

月曜日になってもみちるは出てこなかった。
厚生病院に転院したと担任が話している。みちるに関する噂は、それ以降潮が引くように散って行った。無責任に面白がったことへの後ろめたさを償うかのように。
僕は部活に戻った。週の半ばに一度みちるの母親が学校へ来たのだろう。アプローチを歩いていく背中を部室から見かけたことがあった。普段着姿の母親は、ひとりでとても小さく見えた。
みちるが登校してきたのは、その次の週の土曜日だった。
教室に入ってくると、一瞬同級生たちの喋る声が止まり、みちるが席につくと女子達が丸く囲んで「もう大丈夫？心配したんだよ」と声をかける。自分たちのせいじゃないよねと自分に納得させるためだけに。みちるはびっくりしたように目を開いていたが、「ありがとう　治ったよ」と唇の端を上げて笑った。
女子達の輪が解けたので、みちるの前に立つ。ミキはこちらを見ようともしない。
大丈夫？と聞くと、みちるはじっと僕の顔を見つめる。なくした記憶を思い出すように。少しやつれたみたいだと思った。みちるは、少し笑うと「大丈夫だよ。心配した？」と言った。僕はその笑顔に救われた気がした。今日一緒に帰ろう　思い切ってそう言うと、みちるはごく自然に頷いた。「先に玄関で待ってて」
放課後、玄関で待っていても、みちるは現れなかった。行き違ったのかと思い、教室まで戻ったがどこにもいなかった。確かに玄関で待っててと言ったはずなのに…。
スチール製のシューズボックスのみちるの棚を覗くと、外靴のスニーカーも中履用のシューズもなか

った。もう帰ったのは間違えない。中履用も洗うために持っていったのだろう。
約束を忘れて帰ったと思った。治ったばかりで本調子ではないのだ。仕方がない。
僕は、住宅街への道を曲がりひとりで帰った。
みちるはそのまま学校を去って行った。

月曜日、ショートホームルームで担任がみちるの転校を告げている。
家庭の事情で、札幌へ行くとだけ伝えられた。日直当番に、休み時間にみちるの机を予備室に戻しておくよう指示し、授業が始まった。
僕はその日の授業を憶えていない。ただ放課後、担任がやってきて、みちるから手紙を預かったのだと渡してくれた。その際、転校することは誰にも知らせないでほしいと頼まれていたと言い訳のように付け加えた。
同級生の女子がよく使うような、キャラクターの横封筒に同じキャラクタ-の便箋が入っていた。
短い手紙だった。

しんちゃんへ
急にお別れすることになりました。あたしのお父さんとお母さんが結婚するので、札幌に行きます。
お母さんは前から迷ってたみたいだけど、おじいちゃんとも相談して決めたみたい。おじいちゃんはひ

とりでも大丈夫だからって笑ってました。
しんちゃんと一緒にいられて楽しかったです。もっともっといたかったけど、しんちゃんのお友達からも返してと言われたので、ちょうど良かったです。あたしなんかじゃ、迷惑だったでしょ。やさしいから言えなかったんだよね。ありがとう
大好きでした。
みちる

僕は呆けたように、美術室への階段を上がって行く。
部室へ入り、あの日の描きかけの下描きを取り出す。桜の真ん中に、セーラー服の少女を描き入れる。みちるの顔を描こうと思ったが、うまく思い出せない。水彩画紙にポタリと滴が落ちる。
泣いているのだと気付く。かけがえのないものを無くしたのだと気付いた。
しゃくりあげる。口を押えても、腹の底から悲しみの塊が湧き上がってくる。
僕は泣いた。そして、泣き続けた。

ｉＴｕｎｅｓの曲が切り替わる。ポールのボーカルで曲が始まった。
「The Long And Winding Road」
私は泣いていたのか。目尻がうっすらと湿っぽい。五月の連休最終日、何をするでもなくただ音楽

を聴いていた。家電が鳴る。久しく鳴ったことがなかったので、呼び出し音と気付くのに時間を要した。ディスプレイの番号は、携帯の番号だけを無機質に並べている。間違い電話か。思案している間に電話が切れた。

普段なら、知らない携帯にコールバックすることはない。だが、部屋に差し込む午後の柔らかな陽射しに、ふと誰かと繋がっていたいと思ったのだ。

私は残された着信履歴に再送のボタンを押した。

B―PART　あるいは断章

講演会が終わったあと、愛車の白いミラと運転手兼アシスタントのジュンちゃんを駅前においてここまで歩いてきた。満開を過ぎた桜があの日と同じように散り始めている。校庭に沿ったアプローチに立って、変わらない校舎を見上げた。

この町での講演会を引き受けたのは、偶然といえば偶然だった。

読み聞かせにすごく熱心な図書館から、是非ワークショップをお願いしたいとのオファーがきてますけどどうしますか？とジュンちゃんが聞いてきたのだ。

希望された日時は休みにするつもりだったけど、お仕事があるのはありがたい。受けていいよと言った。ジュンちゃんは休んでいいよと言うと、「私も予定ないから、一緒に行きます。先生の運転じゃ、渋滞の二乗になっちゃう」と笑った。

どこの図書館と訊くと、この町の名前と「はなひとえ図書館です」と返事が返ってきた。

懐かしい町の名前だった。通り過ぎることはあっても、町へいくのはあの日以来初めてだ。ほんの何十日しかいられなかったけど、いまでもあたしの心の一部だ。あたしは携帯をギュッと握りしめた。

図書館は駅のそばにあった。駅は変わらなかったけど、商店街は店が減ったし、連休中とあって国道沿いのコンビニ以外はあまり活気も感じられなかった。あの頃と比べて、三千人近くも減ったのだという。小さな町がひとつ消えたのと同じだ。

だけど、図書館の職員の熱心さは本物だった。もともとバブルにのって建てた多目的ホールを図書館

へ転用したハンディはあったけど、知恵と工夫で近隣の専用で建てられた図書館にも負けない運用がされていた。そればかりではなく、読み聞かせや学校への出張講座、読書会、ワークショップの積極的な企画など、これを館長の他は臨時職員だけの人員でやっているのだ。

その町の文化度は、図書館活動の充実具合がひとつの目安になると思っている。

「花」に「一」に「会う」と書いて「はなひとえ」名前も素敵だし、もっともっと町がお金を出してあげてもいいのにと思った。本が増えてスペースもなくなりつつある。外部からインターネットでの蔵書検索もできないのだという。美術館を建てる計画もあるみたいだけど、その前に専用の図書館だよねとジュンちゃんと憤慨した。

この町を離れて四十年近く。あたしはどうにか、自分とジュンちゃんのごはんを食べられるくらいには好きな仕事でお金をもらうことができる。執筆だったり講演だったりで、色々なところへも行った。両親は結婚後生まれた妹夫婦の近くに住んでいるので安心だ。まだ完全に引退する歳でもないし。あたしはとうとう独身のままだった。後悔はしていないけど。

ワークショップの告知文には、あたしの苗字だけを変えたペンネームで載っている。

あの人が判るわけないのに、もしかしたらと勝手な期待をしてしまう。

案の定、同じ年頃の男の人なんて来なかったけど。

桜が散る中で、あたしは賭けに出る。携帯をもってからずっと、あの人の家の電話番号は入れてあった。それまでは連絡網を繰り返しコピーして持ち歩いてたんだ。

なんでもないの。仕事できたから、懐かしくて電話したんだ。口の中で何度も練習する。

で、もし女の人や、子供が出たら間違えましたって切る。本人が出たら、いまのセリフ。でも憶えているのかな…。あたしは、いつまでもぐずぐずしていた。あの花びらが散るまで。この花びらが散るまで。

そろそろジュンちゃんが心配して電話をかけてくる頃だ。あたしは、間違ったふりをしてあの人の家の電話番号を発信した。

十回鳴らして出なかったから、ボタンを押す。それで終わり。

ちょっと、すごくがっかりしたけど、まあこれでよかったのでしょう。あたしはジュンちゃんを呼び出すため携帯のアドレスボタンを押そうと思った。その瞬間画面が明るくなって、音楽が流れる。携帯を替えるたび、ジュンちゃんに入れてもらった曲。あの人のだけに設定したんだ。

ここで奏でるとは思わなかった。絶対奏でるわけないと思っていた。

「The Long And Winding Road」

長く曲がりくねった道　あなたのドアへと続く

長い時間話していた。あたしは桜に埋もれてしまうんじゃないかと思った。

携帯を切って、一層激しくなった桜吹雪の中を、あたしは歩いていく。

あそこの角で、右に曲がるんだ。ジュンちゃんにもう少し遅くなるからって連絡しなきゃ。

桜の花びらが舞っている。あれはしんちゃんとあたしの桜―

了

さくらいちえ―桜一会

２０１４年３月１日　発行

著　者　　弥生川　玲

発行者　　弥生川　玲

出　版　　らんこし作家デビュー・プロジェクト

© Rei Yayoikawa　2014